

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第一15:35～41 「復活のからだ」

[35]「ところが、ある人々はこう言うでしょう。『死者は、どのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか。』」

パウロはコリント人たちに復活の確実性について教えてきたが、それでもさまざまな疑問を抱く人々がいた。人間は死んで葬られ、朽ち果てて、それで終わりではないか。それがどのようにしてよみがえるのか。あるいは事故などで不具になった者は、よみがえってもそのままか。

[36-37]「愚かな人だ。あなたの蒔く物は、死ななければ、生かされません。あなたが蒔く物は、後にできるからだではなく、麦やそのほかの穀物の種粒です」

パウロは復活に疑問を抱き、あるいは嘲笑い、非難する者に対して「愚かな人だ」と一喝する。彼はここで植物の例を示す。蒔く物すなわち種は死ななければ生かされないのである。このことは主イエスもたとえ話の中で語られている。→ヨハネ12:24

種のかたちは死んで分解するが、しかし間違いなく、その種のいのちは存続しており、発芽する。しかも今度は先の物とは比較にならぬすぐれた姿、形になる。こういった点において人間の復活も共通点があるのである。

[38]「しかし神は、みこころに従って、それにからだを与え、おのおのの種にそれぞれのからだをお与えになります」

植物の種は一種類ではなく何万種類もある。神はご自身のみこころのままにそれぞれのからだをお与えになった。さらにこういう例は植物だけではない。

[39]「すべての肉が同じではなく、人間の肉もあり、獣の肉もあり、鳥の肉もあり、魚の肉もあります」

動物界における肉の種類も数多くある。このようにこの世における肉でさえ多種多様であるならば、復活の時の私たちのからだは、今と同要素、同成分である必要はなく、ちゃんと別の復活に適したすばらしいからだを与えられるはずだというのである。それはもう古び衰えていくからだではなく、永遠に続くすばらしいからだなのである。→マタイ22:23～30（復活の時には、人は……天の御使いたちのようです）

[40-41]「また、天上のからだもあり、地上のからだもあり、天上のからだの栄光と地上にからだの栄光とは異なっており、太陽の栄光もあり、月の栄光もあり、星の栄光もあります。個々の星によって栄光が違います」

「天上のからだ」とは様々な説があるが最も適切と考えられるのは天体を指すというもの。すなわち太陽、月、星である。そして、今まで見てきた地上の人間、獣、鳥、魚、これらをすべて含めて「地上のからだ」とすると、それらは当然「天上のからだ」とは違うということとなる。そして「栄光」を光、輝きと理解すると、地上にあるものの美しさ、輝き、優雅さ、強さなどと比べると、その地上を照らす天体の輝きはもっと偉大なものではないかということになる。そして個々の天体の輝きは皆その輝きが違う。

このようにしてパウロは様々な例をあげながら、そのような多種多様なからだをお造り

になられた創造主なる神が、私たちの現在のからだとは別のよりすぐれた将来のからだをお造りにならないはずはないということを論証する。復活のからだは確かにある。それも今の私たちの古び衰えていくようなからだではなく、永遠に続くすばらしいからだを用意されているのである。私たちはやがて復活の時にはその新しいからだを与えられることを待ち望みつつ、今この地上に置かれている間は地にしっかり足をつけ、堅く信仰に立って生きていくことが大切である。